

## 地名による名栗川上流部のタタラ場の痕跡

戸谷 克己 著

―タタラノ頭という山名は、まさにその山の周辺に、  
かつてタタラ場があったということをも雄弁に物語っている

埼玉県の飯能市を流れる人間川、そして、その上流の名栗川の周辺には、タタラ場の痕跡を示す地名が数多く存在する。タタラとは、日本のかつての製鉄法で用いた用具のことで、それに関連した地名が残っているということは、言うまでもなく、かつてその周辺で製鉄ということが行われていたということをも、雄弁に物語っている。名栗川の源流に、まさにそのタタラ場の痕跡をそのまま示す「タタラノ頭」という山名が存在する。「タタラノ頭」はもうひとつのピーク「橋小屋ノ頭」と共に「有間山」という山を形成しているのだが、「タタラノ頭」という地名は、まさにこの山の下方(周辺)に、かつてタタラ場があったために、そのように呼ばれるようになったと思われる。

そのような視点で、この周辺の地名を見ていくと、タタラ場に関連する金山・金比羅山・妙見様・観音尾根・棒ノ嶺等の山名や、カジクイ谷・タタラ入。炭谷入・逆川といった沢(川)名や、鍛冶屋橋・鍛冶ケ原(現八ヶ原)・芋浦美・稲村・浜居場・穴沢。鷹ノ巣・ホーデ久保といった地名が目につき、これらの山や沢(川)や場所の名前によって、まさにここに製鉄によって暮らしていた人達の生活があったということが如実に感じられる。

山名の金山や金比羅山は、まさに金属(鉄)そのものを表す山名であり(金比羅山のヒラは古代縄文語で崖や坂のことを意味し、その山域の崖や坂から金属＝鉄の原料が採取されたことを意味している)、妙見様や観音尾根は山師(鉱山師)や製鉄業に携わる人達が信仰する妙見菩薩や十一面観音に因んで名付けられたものと思われる。古代においては、地中の埋蔵物の金属は空の星が降ってきて地中で育ったものと信じられており、そのために空の中心の北極星は妙見様と呼ばれて崇められていた。十一面観音が崇められたのは、鉱山の発見や採掘に関わる人達が信仰する白山姫神の本地垂述説に基づき神仏同体の仏であるのであろう。また、棒ノ嶺は元々棒ノ折山と呼ばれ、その頂上に折れた石棒(陽根の象徴)が埋められていたことから、そう呼ばれるようになったことであるが、「古事記」においても、製鉄に携わる親方(村下)のことを「鍛人天津麻羅」と呼び、鞆(フイゴ)に用いるピストンのことをマラ(陽根)に見立て、溶鉱炉のことを「ホト(陰部)と呼んでいるように、古代の人達はまさに生殖と金属の生成とを同一視していたということが分かる。そのような意味で、鉄の生成において豊穰な恵みがもたらされることを願って、山の頂上に石棒を埋めたものと思われる。それに現在においても山名を「××丸」と呼ぶことがあるが、朝鮮語でマルは峯や嶺を表し、その朝鮮語がかって帰化人等を通して日本に持ち込まれ、他の人達よりも様々な能力において優れ秀でている人を表す言葉として用いられ―マルは発音上マラやマロという語形変化を生み出し、村下(親方)をマラと呼ぶようになったのであろう。そのことを物語るように、石上麻呂・坂上田村麻呂・柿本人麻呂といったように、帰化人が大量に日本に渡って来

た時代に、マロは人名に用いられることが流行し、その後も、そのような意味で船や刀や幼児の名前に「丸」という言葉が付けられるようになったものと思われる。

地名の鍛冶屋橋や鍛冶ヶ原は、まさに、その地名の周辺には鍛冶に携わる人達が多数集って、それを生業にして生活を織り成していたことを示している。芋浦美の芋はタタラから取り出した棒状の錳母(イモ)のことを表し、稲村の稲(イナ)は製鉄の時に辺りに飛散る火花のことで、現在雷のことを稲妻や稲光と呼んでいるのは、元々は稲に関連するからではなく火花に関連した火花の先や光のことを指しているのであり(浜居場という地名のイバはイモバかイナバの詰まった地名であるだろうか)、これらの地名からその地名の周辺に製鉄業⇨タタラ場に携わる人達が確実に存在して生活を営んでいたということが分かるのである。それから、穴沢の穴は砂鉄を掘り出した鉄穴のことで、ホーデ久保は飯能市の阿須(アズは古代語で鉄のことを意味する)が、フーデクボやホーデクボと呼ばれており、ホーデもフーデも語源的には同じもので発音が変わったものと思われるが、タタラ場においては鉄を生産するためには大量の「風」を溶鉱炉に送り込んでやらなければならず、フーデクボとは豊かな自然の風に恵まれた窪地という意味ではないかと思われる。また、鷹ノ巣という地名は、製鉄に深く関わった帰化人の秦氏の一族が鍛冶神と仰いだシンボルが鷹であり、このような地名の語源を探っていくと、まさにこの周辺には、かつてタタラ場が多数存在していたという事実が明らかになっていくのである。

沢や川の名前の、カジクイ谷、タタラ入は、その字句通りの鍛冶や踏鞴を意味し、その谷や沢(入)を示しているのだろう。(タタラ入は、その上部にタタラノ頭が存在するので、その関連でタタラ入と名付けられたのであろう。)炭谷入は、鉄を精錬する場合、砂鉄の量の五倍以上の炭を必要とするために、その精錬に必要な炭を焼く窯がその周辺に点在していたために炭谷と呼ばれ、そこを流れる沢であったが故に、そのように呼ばれるようになったのであろう。炭は「こ」だけではなく、名栗の谷の至る所で焼かれ、タタラ場で利用されたものと思われる。「砂鉄七里に炭三里」という諺通り、同じ重量であっても嵩は圧倒的に炭の量の方が多いのであり、タタラ場にとって炭が取れる場所が近くにあればある程良かったのである。

ただ、川や沢の名前の内、逆(サカサ)川だけは、その名前からタタラ場を想起するのは困難である。逆川という名前は、全国各地のタタラ場があった場所には、かなりの頻度で登場する名前である。「逆さ」という言葉の関連から、タタラ場が存在する「境い」⇨境界を示す言葉であるという説があるが、私は普段の常識や慣習と違った「逆さ」の行為がタタラ場で行われていたために、そのような名称が付いたものと思われる。私達が蕎麦や饅頭を茹でる場合、お湯に水を注すのであるが、死者の葬送においては遺体を湯灌する場合には、逆に「逆さ水」といつて水にお湯を注すことになる。日本人は縄文の時代から、この世とあの世は逆であると考え、例えば葬送の時には服を左前に着せたり足袋を反対に履かせたりして来た。鉄を鍛造する時に「焼き入れ」といつて、水の中に熱した鉄を入れて鍛えるが、それが死者を湯灌する時の場合と同じことから、そのような形で水を利用する川(沢)を「逆川」と呼ぶようになったのであろう。この「逆川」という名前を持った川がタタラノ頭という山の下部を流れているということは、ここにタタラ場があったということの有力な証拠以外の何物でもない。(戸谷)

ARTLIFE CRAZY

## 地名による名栗川上流部の タタラ場の痕跡

- タタラノ頭という山名は、まさにその山の周辺に、かつてタタラ場があったということを雄弁に物語っている

